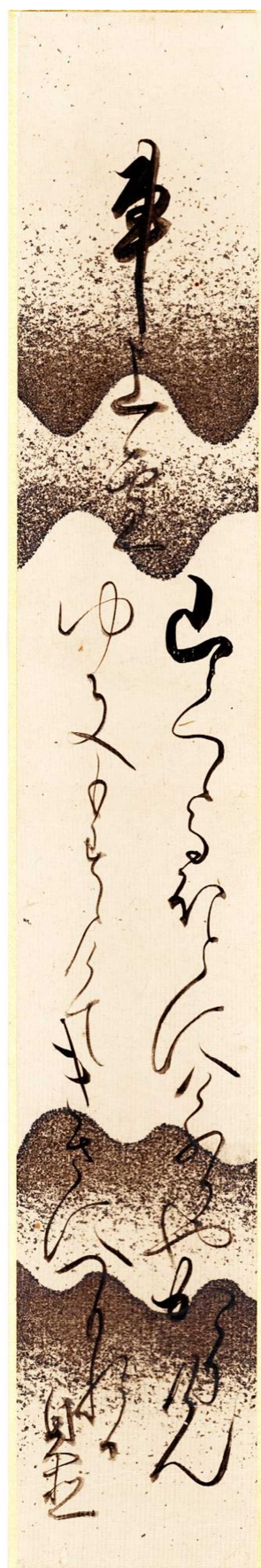


意題短冊集

石川貞直詠

1. 車上雪



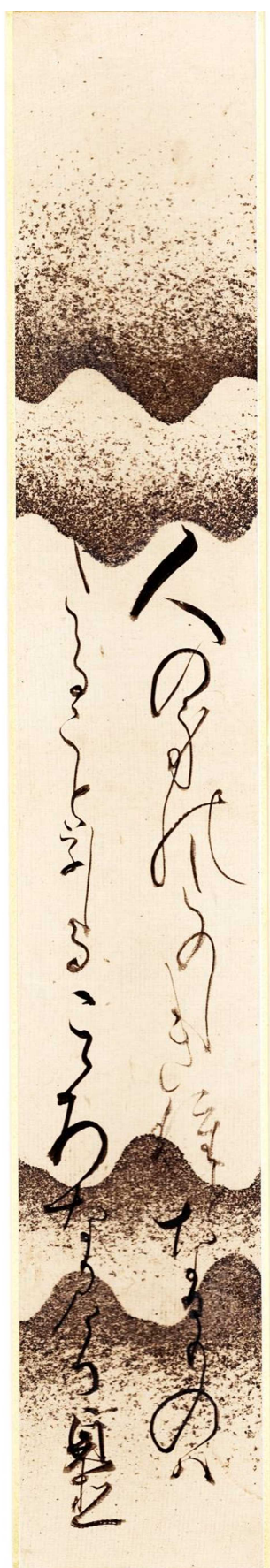
車上雪

山くぐる本とに介ふりやかゝり介ん
きすけ
ゆまも春ゝ介てきさにつもれる 貞直
さだなお

車上雪

山くぐるほどに煙やかかりけん
すす
雪も煤けて汽車に積もれる 貞直

2. 無題（百歌集37）



人の身能多のしき種となるものハ
の た は
多ることを乎しるころなり介り 貞直
た を け

人の身の楽しき種となるものは
足ることを知る心なりけり 貞直

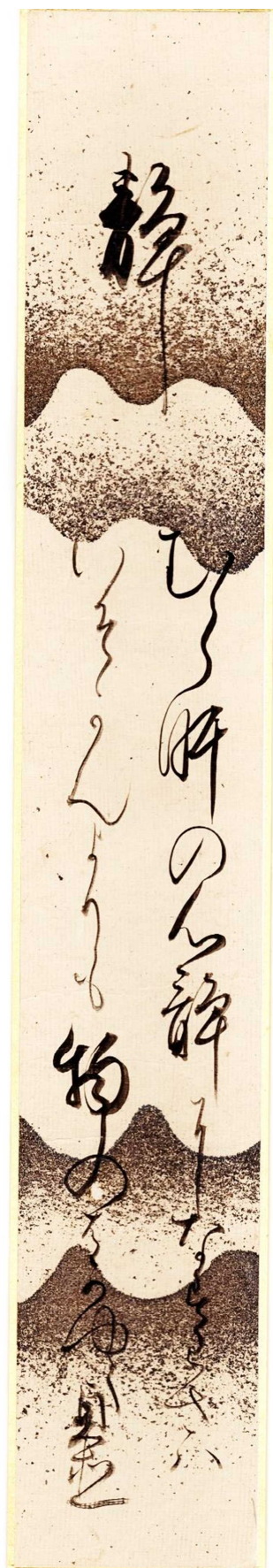
3. 静 (百歌集29)

静

村肝の心静かになすわざは
急がんよりも物のはかゆく 貞直

静

むら肝の心静耳にな春王さ八すわ
いそ可んかよりも物はの者可かゆく 貞直



4. 除草（百歌集14）



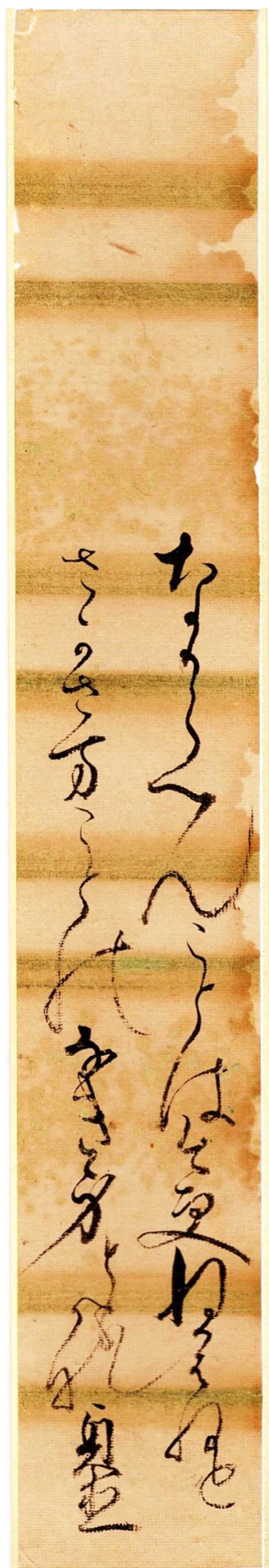
じよそう
除草

かに
可尔つめもくるまも阿れと田草取
あ
ぐさ
わ
に
は
け
王さは人手尔及者さり介り 貞直

除草

かにづめ
蟹爪も車もあれど田草取る
わざは人手に及ばざりけり 貞直

5. 無題

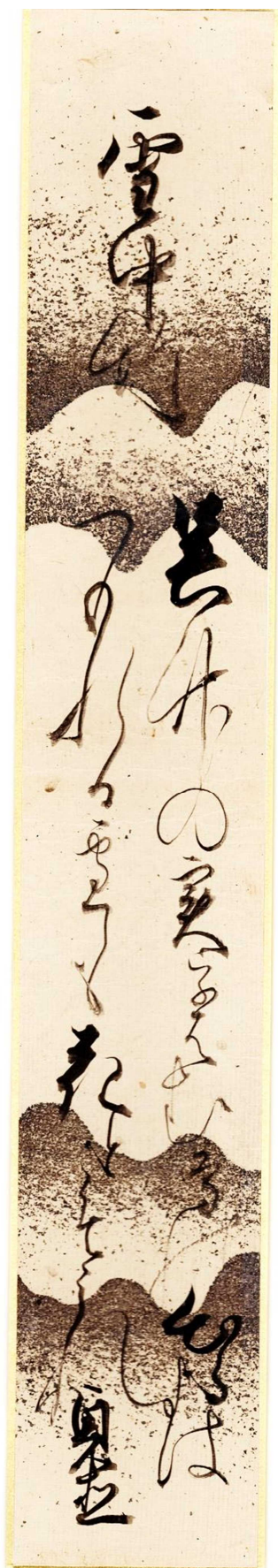


な可^からへんことは今更ね可^{かは}者ねと

さ可^かま^ま万こと能^の奈^なき身とも可^{かな}那 貞直

長らえんことは今更願わねど

逆さま事の無き身とも哉 貞直



雪中竹

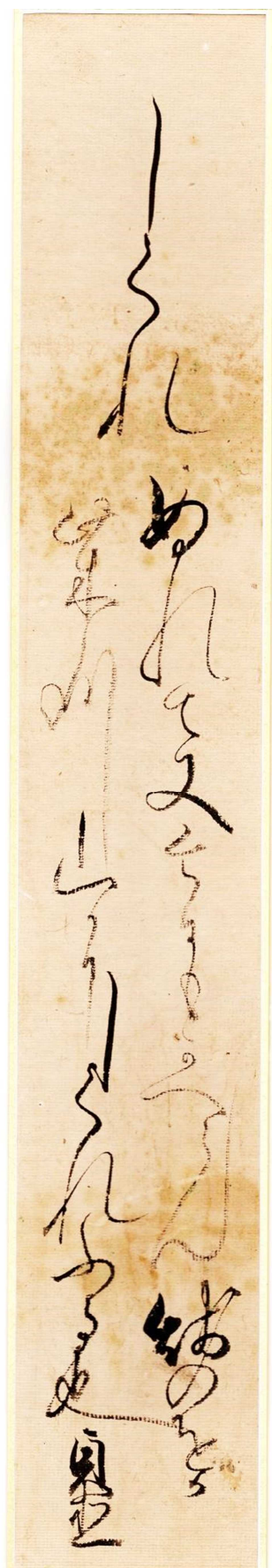
呉竹の実をは乎者のむ鳥能出いずるよは

つもれる雪も花とこそ三みれ 貞直

雪中竹

呉竹の実を食はむ鳥の出いずる夜は
積もれる雪も花とこそ見れ 貞直

7. しぐれ



しくれ

ぬれて又今日も可^かへらん賤^{しず}のを可^か

柴刈^に山耳しくれふる也 貞直

しぐれ

濡^ぬれて又今日も帰らん賤^{しず}の男^おが
柴刈る山に時雨降る也 貞直

8. 橋 (百歌集94)

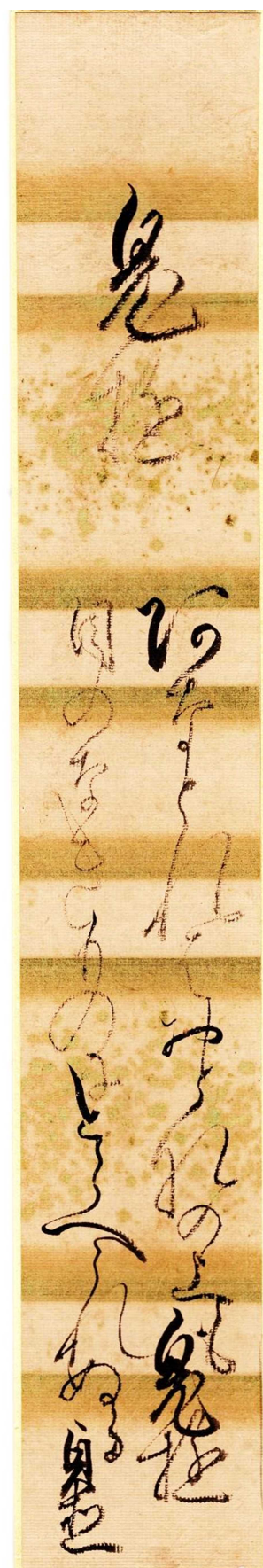
橋

鉄の柱を立てて人皆の
世渡る橋もつくりてし哉 貞直

橋

くろがね は を た の
鉄の者しら乎多て人皆能
わた かな
よ玉多る橋もつくりてし哉 貞直





鬼遊

阿^あなとれ者^はおと那^なの上も鬼遊

目のなきもの^に尔とらえられぬる 貞直

鬼遊

侮れば大人の上も鬼遊び

目の無きものに捕^{とら}えられぬる 貞直

酒

酒は薬なるを
惜しくも人の過つる可那 貞直

酒

よ^{きほ}起本とに吞めは薬となる酒乎^を

惜しくも人の過しつる可那^{かな} 貞直

酒

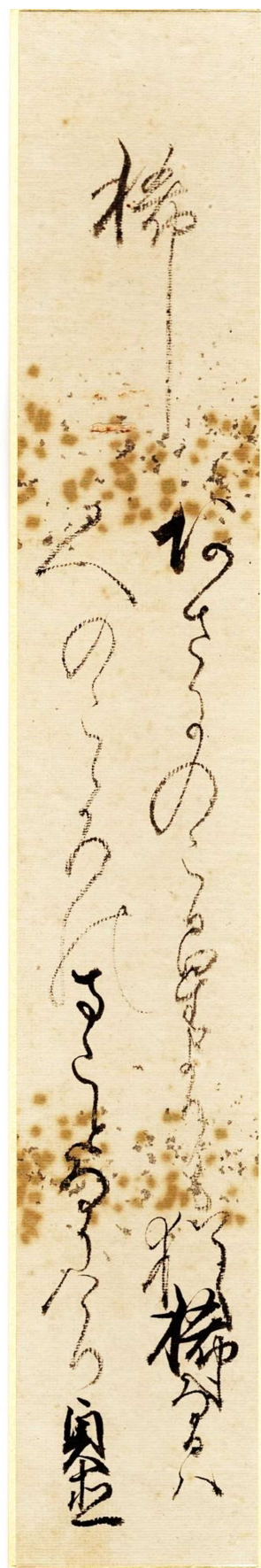
良き程に飲めば薬となる酒を
惜しくも人の過ごしつる哉 貞直

稀

朝に残る星よりも猶稀なるは
人の心の誠なりけり 貞直

稀 まれ

あ阿さるのころ星よりも猶稀奈る八
に
のま人のころ能万こと奈り介り 貞直
なけ

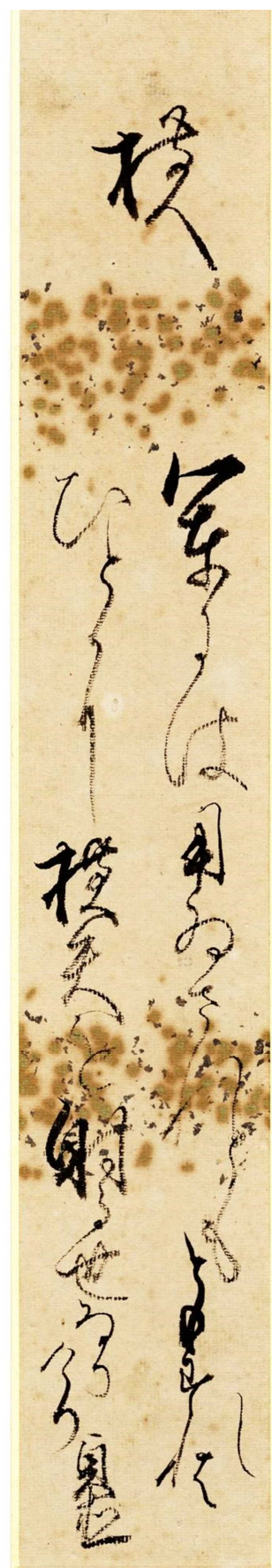


横

軍には用いざれどもともすれば
人に横矢を射る世なりけり 貞直

横

軍は用ゐられともとも春れ者
ひと耳横矢を射る世なりけり 貞直





世

う川^つせ三^みのよ王^{わた}多^たる橋^あの阿^はやふき八^は
人^ののこゝろ能^のうこくなり介^けり 貞直

世

うつせみ
現^う人の世^つ渡る橋^せの危^みうきは
人^あの心^はの動^はくなりけり 貞直



山

よ能^のちりの積もりてなれる物としも

見えぬは山の姿なり介^けり 貞直

山

世の塵^{ちり}の積もりてなれる物としも
見えぬは山の姿なりけり 貞直

寒川

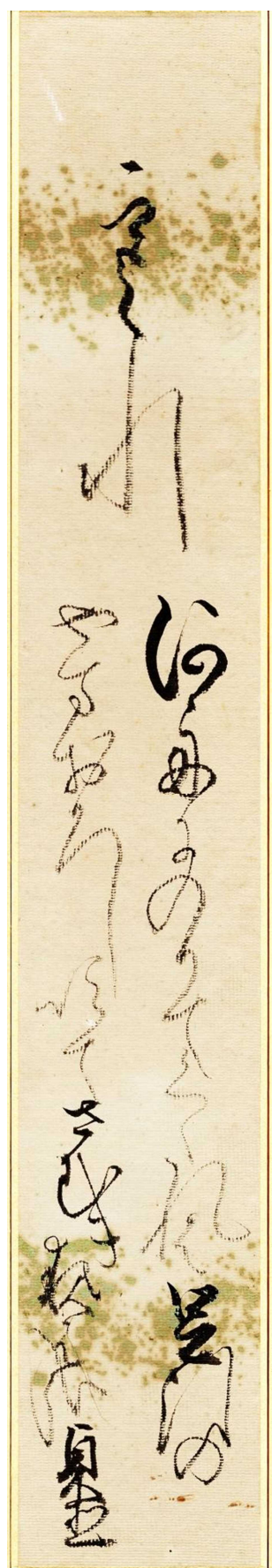
河舟に乗りて下れば足引きの

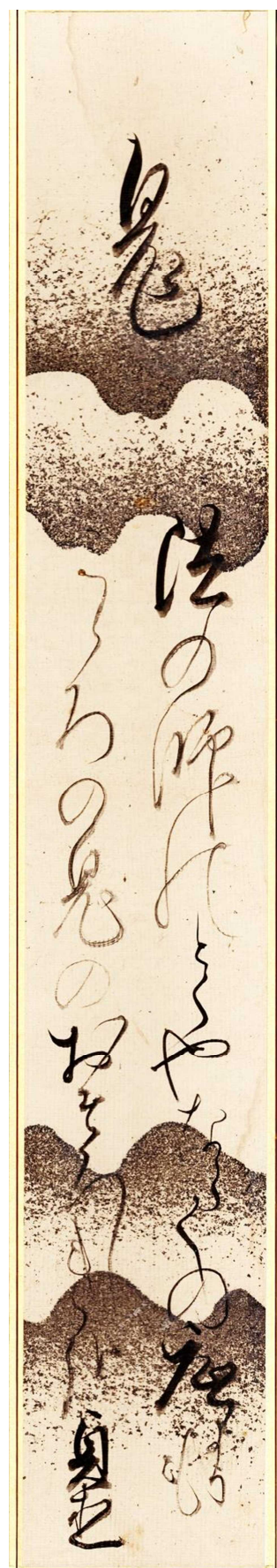
山おろし吹きよわて寒き夜半哉 貞直

寒川

河舟にのりてく多たれ者足引はあしびきの

や万まおろし吹てさむき夜者哉 は貞直





鬼

法の師能とくやならくの底よりも
ころの鬼のおそろしき哉 貞直

鬼

法の師の説くや奈落の底よりも
心の鬼の恐ろしき哉 貞直

晴

大空の雲霧よりも世の人の

心の闇を晴らしてし哉 貞直

晴

大空の雲霧よりも世の人の

の
み
を

心の闇を晴らしてし哉 貞直

晴

大空の雲霧よりも世の人の

心の闇を晴らしてし哉 貞直